

〔翻 訳〕

癸 丑 日 記 (上)

作者 仁穆大妃内人

訳者 梅 山 秀 幸

—

万曆壬寅の年 (1602) に、中宮 (仁穆大妃) が御懐妊なさったという話を聞いて、柳哥はなんとか流産させようところみた。急に驚かせたり、御殿に石を投げたり、宮廷の内部の者と通じて女房の厠に穴をうがって棒をつっこんだり、下人のたまり場に火つけ強盗が出たという噂を流したりしたのだった。こうしたうち続く変事に、ようやく宮中でも柳哥を疑うようになった。

癸卯の年 (1603)、中宮は女のみ子をお産みになったが、誤って伝わって、男のみ子が生れたと聞いて、柳哥はお祝いを申し上げることもしなかった。しばらくして女のみ子だったと聞いて、胸をなで降ろし、おっとり刀でお祝いを申し上げた。それで見ても、どれほどやきもきしていたかがわかうというもの。

その後、丙午の年 (1606) に今度こそ男のみ子が生れたという消息を聞いて、柳哥は頭を痛め、よこしまな考えを巡らして、嫡子が生れたために婿の光海君の地位が危うくなったとして、光海君を擁する味方の臣下たちや鄭仁弘らを語らった。

「さあ、光海君のためにクツ (お祓い) を行い、占いも行うのだ」
と企んで、光海君が立つにあたっては、次に、臨海君に子息がないのもつけの幸いに、臨海君を世子とし、その後今度生れた大君に伝えるという噂を流し、「ソ
ンモクチュ、マンモクチュ」という童謡を作って、明に奏請することを催促した。

甲辰の年 (1604) に光海君を王世子に封ずるという表文をねんごろにしたため、うやうやしく明国にさし出したが、明朝に対しては賄賂を贈って買収することもで

きない。明の朝廷はひたすらに生真面目で融通がきかず、皇帝もきびしく、その言葉もこの上なく厳正なものであった。

「国家の重大な礼として、第二子を王世子とすることは家と国とを滅ぼすことである。明朝は全天下に法を広めようとしているのだ。朝鮮の一朝廷のために理を曲げるものではない」

皇帝の意志は固く峻絶としていて、その後もこの話を続けると大いに面責をこうむることになって、朝鮮でだれかを世子に封じることも将来にわたってなくなるのではないかと憂慮した。その後に礼部官と宰相が交代することになって、もう一度奏請しようとしたが、途中でやめてしまった。そのことを聞いて、柳哥の一派は、

「嫡子が生れたので、光海君を世子に封じることを明朝に奏請しないのだ」とやっかんだ。大王が病患に陥られたとき、鄭仁弘や李爾瞻など五、六人が上疏して、

「柳永慶は臨海君のことを考えて、光海君を世子に封じることを奏請しませんでした。首相の柳永慶の首をください」

と申し上げた。このような王様のお心に逆らう横暴な奏上を際限なく行って、とても言葉にできないようなことをぬけぬけと上疏する。王様はすでに何年間も病の床に臥し、寝食もままならず、糸のような気運でいらっしゃるのに、こうした上疏文を御覧になって、

「あの者たちはどうして君父を脅迫するようなことをいうのか」とおっしゃった。御憤慨になり、怒りをこらえきれず、寝食をまったくお廃しになって、

「仁弘などを流してしまえ」とお命じになった。

やっとのことでこの命令をお下しになったものの、そのままとうとう王様はお亡くなりになった。そこでただちに、いささかの遅退もなく光海君とその嬪を寝殿に入らせて、啓字と璽宝と馬牌など、大切な王の印をただちに渡してしまうことになった。光海君とその他の王子に下された王様の御遺言を、後宮の女房が伝えたので、

「永昌大君に対してなされた御遺言を今いっしょにお話してください」と、人びとが請うた。中宮は悲しみで人事不省といったありきまで、
「その御遺言を今いってはならない」

とおっしゃるのみであった。大勢のしからしむるところだったから、まず光海君に知らせるために朝廷に使いがおもむいた。

二

こうして、御遺言が下ったものの、その曖昧なことが大きな欠点と思われた。現実に永昌大君を立てることもでき、大権を掌中に握っておられたのに、璽宝を持ち出して行使することもなく、光海君の御殿にすぐにお送りになった。そうして王様の御遺言にはまた、

「たとえ讖言や謀略があったとしてもそれに心を止めず、永昌大君を可愛がるように」

とおっしゃっていたものを、だがどうしてその御遺言のままに永昌大君をお立てすることがあったろう。

丁未の年(1607)の十月、王様のお加減が悪かったときにも、光海君と嬪とをただちに呼び寄せて枕もとに座らせ、薬をその手からお受け取りになった。光海君に至らぬところがあって王様のお心にそむくことがあっても、仁穆大妃がいらっやって、間に立って仲をお取りなしになったので、そのときには、

「内殿(王妃、あるいは王妃の住む殿舎)の徳ははなはだ貴重である」

と、光海君も喜んでいたものだ。ところが、しだいに、内と外とに仲たがいさせようという人がいて、まず臨海君から亡きものにしようとして謀りごとをめぐらした。良くないことには凶なること、悪なることがたび重なって、ついには訴状に大きななわざわいごとを書いて出す者があったが、世の中にはどうしてそうした奸邪な輩がいるのだろうか。

大体、光海君という方は幼いころから利口でなく、ほうとしていらっやって。ところが、壬辰倭乱のときにいきなり光海君を王世子と定めることがあって、それからというもの王様はいつも教訓し、さとしておられたが、まったく素直でなく、教えさとされることに、まるであだ敵のように歯向かって来る。そこでまた王様はさとして、

「息子として親に対してどうしてあのように振る舞える道理があるのか」

とおっしゃって、気にいらず、不快なこととお考えになった。懿仁王后が亡くなって殯殿にいらっやってたときにも、一人の後宮の姪を入れて、もてあそび、妾にし

てしまおうとしたので、王様は、

「なんということだ。どうしてそんな不道德なことをしようとするのか」とおっしゃって、お許しにならなかった。光海君はそのことを深く恨んでいたが、丙午の年（1606）に大きな禍を起こし、大きな勢力を得ようと大いに欲心を出し、表面では王様をだまして取り入り、後宮をおどした。

「わたしがすることを王様に告げ口したり、あるいは姪を妾にしてくれることを拒んだりすれば、後日、三族すべてをほろぼすぞ」

光海君はそう脅迫し、おどかして、一方では女房を送って、その姪を奪って来させたので、王様はそのことを聞こし召し、大いに醜悪なこととお思いになって、おっしゃった。

「むかし、世宗の時代にお後の昭憲皇后をその父のことで太宗が廃そうとなさったところ、世宗は『お父さまの仰せのとおりにいたします』とおっしゃったものの、『八歳になる息子が不憫でどう処置できよう』とおっしゃって、お后を廃さずに守り通されたことはあった。だが、今回は、一人の若い女子の何に目がくらんで、親をだましてまで、連れて行こうとするのか。凶悪な心だ」

そうおっしゃって、それ以後からは、光海君をよくは思われなくなった。

おおよそ、永昌大君が生れた丙午の年（1606）から、光海君は王位を半ばあきらめたのだが、その気持ちを取り直し、大君を眼中の釘か気に食わない妻の連れ子のように邪魔物と考えた。大君が大きくなるにつれて、光海君は大きな変を敏速に起こし、早く亡きものにしようと、柳哥と日ごとに謀議を行った。物ごころもつかない大君はかぎりもなくあわれで、気の毒で、いつも、大小の事につけて、やさしく振る舞うこともせず、荒々しく王様のお心に逆らって、虐待することがはなはだしかった。

鄭仁弘などはぐずぐずして謫所にまだおもむいていなかった。王様がお亡くなりになった日、ただちに宮廷に呼び返され、手順も踏まずに高い官職についた。そうして、お亡くなりになって二週間も経たないのに、光海君は兄の臨海君について外戚の者から司憲府と司諫院に諫諍させることとした。臨海君にその上奏の文書をお見せしていうことには、

「今からでもすぐに宮廷をお出になれば罪を晴らすことができます。ところが、宮中にとどまっていられちゃるので、罪がいよいよ加わっていくように思われます。早く宮廷を立ちのかれた方がよろしいでしょう」

といい、その一方では軍兵を召集して、宮廷の外に潜伏させて置いたのだった。

三

臨海君が計略にだまされ、宮廷をただちに出たところを兵士たちがいっせいに追いかけて包囲し、備辺司に拘留した上で、江華島の喬桐に流して、そこでもきびしく監禁した。明から取調べの御使唐人が来たが、光海君は臨海君についていう。

「全身弱っている様子だから、妻子とともに生かして置こう。もし元気になったら、面倒だから、殺してしまおう」

御生母である恭嬪の従兄である金礼直を送って、ねんごろになだめすかし、なぐさめたので、臨海君はその言葉のとおり信じたが、しかし御使唐人が本国に帰ってすぐに、光海君は腹心の医員をやって、毒を盛って殺させたのであった。

臨海君を殺すとき、永昌大君もいっしょに殺してしまおうと一度は上訴文をさし上げる者があったが、朝廷ではその是非を議論して、

「今はまだ襁褓の中にあり、また新政を行おうとするときに兄弟二人ともに殺してしまうのは、いかにも無惨だ」

ということになって、大君は殺さず、そのままに置いていた。

光海君は日に三度ずつ仁穆大妃に対してお見舞いに來られていたが、それがしだいに月の初めと十五日の二回になり、それも何か理由があれば休みがちになった。また、お見舞いなさっても、大妃さまが時候の挨拶をなさったり、心のこもった言葉をかけられたり、また王家に対して心配なさっていることを、言葉に気をつけて、

「どうしたものか」

といって相談なさったりすると、不快そうに手を振り、国母さまのお言葉を聞かずに、そのまま立ってお部屋を出て行かれた。こうしたことがあった後で、しばらくの間、光海君はお見舞いに來てもしばしとどまることもなく、座るふりをするかしないかで立ち上がり、母子の間でいかなる愛情こまやかで、和氣藹々とした言葉のやり取りもなかった。

大王が亡くなって二十一日目のこと、光海君が大妃さまのもとにお見舞いになり、普通、友人の父親の喪であっても、初めて友人に会えば哭を行うのがしきたりだが、大妃さまが悲しんで、哭をなさっているところに入って来るや、光海君は手

を振っていやがり、近くに侍っている人に、

「お泣きにならないようにさせろ」

と命じた。光海君は一人でぶつくさと不平をいい、哭をしようとしないのはもちろんのこと、少しも死を悲しむ様子もない。子どもに対する愛情もなく、一家の者が喪家にやって来て、寒々とした気持ちになってしまう。まことに人情の一かけらもないありさまだった。

大王の廟号をお決めになるとき、大妃さまがおっしゃった。

「壬辰倭乱のとき、衰えかかった国家を復興なされた功績は計り知ることができないもので、王朝の系譜の誤って明に伝わっていたのを正された功も大きい。それは創業の主にも劣るものではありません。廟は先例にとらわれず、深く配慮をお願いします」

光海君はしばらく考えて、おっしゃった。

「多少の手柄があったとしても、壬辰倭乱で朝鮮を荒廃させ、先祖の魂が平安に過ごすことができなかった。どうして功があったなどといえよう。またと議論するまでもないことだ」

大妃さまは光海君に説いて、ねんごろに言葉を尽くされたが、光海君が聞き入れないのみならず、反発して、

「『宗』の字をおくり名につけられても、よいことはございますまい」

といわれるのは、まことに不孝のきわみである。

昔から、寡婦となった後は初喪の時、陵を拝するのが礼なので、大妃さまは

「出かけたたい」

とおっしゃったが、光海君は、

「まだ行かれてはなりません。あえてお行きになるなら、小祥のときになされよ」

とおっしゃる。そこで、小祥のときまで待つて、ふたたび大妃さまが、

「出かけたたい」

とおっしゃると、また、難癖をつけて、

「朝廷があまりいい顔をせず、お行きになることはできない。大祥のときにお出かけたください」

といわれる。また、大祥のときが近づいて、光海君がいわれる。

「すでにみな終ってしまったのに、今ごろお出かけになっても、何か有益なこと

がありましようか。昔、王后たちが行かれたという礼也没有。人民に迷惑をかけるばかり、お墓のお世話をするというのでもないのに、絶対に行かれるな」

三年の間、大妃さまがねんごろをお願いしても、なだめすかしても、光海君は聞き入れることがなかった。これほどお気の毒なことがいったいどこにあらうか。

「魂殿にお参りしたい」

と、大妃さまはおっしゃったが、それもまた何度もさし止められ、いたし方なく、光海君のお妃に哀切をお願いしたところ、妃が

「王様の融通がきかないものだから、急いでお参りになれるようにすべきでしょう」

とおっしゃって、ようやく許されるようになったかのごとくであった。

ところが日時を急に決めて女房を送ったが、光海君妃の弟の柳希奮の方には日を延期するといって、われわれのところでは急いで祭奠に使う飲食の仕度をするというようなことがあった。妃はたいしたことではないと見なして大王のための祭奠を行うまいとしたり、いきなり思い出したかのように行おうとしたり、人への配慮をいささかもすることがなかった。大事を、われわれが穩便にすませようとするのにさえ、このような仕打ちをして、どこかに恥かしいなどという気持ちが残っているのだろうか。飲食をせっかくととのえた後になって、何日も日が延びて、われわれの御殿では仕度したものをすべて捨て、新しく用意しなくてはならなかった。

四

内殿の方ではたまに光海君がお食事を取られることがあって、そのとき貞明公主がお相伴なさることはあっても、永昌大君がお相伴なさることはなかった。光海君は、

「大妃殿にお見舞いにかがいに行って、大君の声を聞くのは不愉快だ」

といわれる。

ある日、大君が、

「大殿（王、あるいは王の住む殿舎）のお兄さまが見たい」

といって、公主といっしょにおふたりで拝謁されたとき、光海君は座っておいで、

「公主はこちらにおいで」

といて、抱き上げて、

「ほんとうに賢くて、かわいい」

といい、大君の方は振り返ることもなく、言葉もかけられなかった。大妃さまが気をもんで、

「あなたも御前にお行きなさい」

とおっしゃって、大君を前に押し出されるが、やはり一瞥もなかった。大君は泣きながら出て来て、

「大殿のお兄さまは、お姉さまは可愛がって、わたしの方は振り返りもなさらない。わたしもお姉さまのように女に生れればよかったのに、どうして男に生れたのだろう」

といて、一日中お泣きになり、見るからにお可哀想であった。

光海君はいつもいわれた。

「わたしが生きている間は、十人の大君がいようと怖くはないが、わたしの息子は、大君の甥ということになる。端宗の時にも甥の端宗を殺して世祖が立つということがあった。わたしの死後、どうしてそうしたことが起こらないといえよう。わたしはかならず大君を亡きものにして、わが子が安心して気ままに過ごせるようにしよう」

このようなことを聞き続けていたものだから、光海君の世子は永昌大君を見るのをいやがって、いつもまるでこわいものを見るかのように振る舞った。

王様が亡くなって三カ月が経ち、大殿自身はお食事を召し上げらず、大妃さまに肉のおかずを勧め、二回勧めて、大妃さまはようやくお箸をおつけになった。牛の内臓の吸い物をこしらえてさし上げると、大妃さまは召し上がって、食事の後に、こっそりと頼んで

「この吸い物がいちばんおいしい。冷やして置いて、後でまたいただく」

とおっしゃった。ある女房が冷笑して、

「たった一日も粗末な料理すら召し上げらず、暑い夏の季節に三、四カ月も元気に過ごしていらっしやっただのに、今になって、大妃は勧められて、あわてて肉のおかずを頼ばり、牛の内臓の吸い物も、御殿にいらっしやるのに、貧乏人のように取って置いて残りを召し上がろうというわけだ」

というので、聞く者は気の毒に思い、あさましいと思ったりもする。

五

丁未の年(1607)の十月から王様のお加減が悪くなって、世子の光海君はお次の間で看病を行っていらっしやった。しかし一刻として真面目に座っていることはできなかった。すぐにまつりごとを見る役所に移って、敷物を敷いて座っているにはいられたが、父王が亡くなった後に、こんなこともいわれた。

「冬のさ中に、あれほど寒いところに座っていたことは、死んでも忘れない」

その上、殯側にも一月に一度行くか行かないかのありさまである。悲しむ様子はいっさいなく、服喪中にも笑いがおのずとこみ上げてくる様子。大殿でのお食事の品数も減らすふりをして、口をおおって笑いをこらえようとするものの、とうとうこらえきれず、嘔き出されるのは、はたで見えて、はなはだ恥かしいものであった。

大妃さまは殯側に座って哭し、嘆くことをおやめになることができない。それを聞いて、光海君は、

「この泣き声はどこから来るのか」

といわれる。宦官が、

「母君の泣かれる声です」

と答えると、

「どうしてあんなに泣くことがあろう。王は春秋をたくさん重ね、生きたいだけ生きたのだ。それを悲しむのは滑稽だ。あの方は人間がいつまでも生きられるとも思っているのか。泣き声など聞きたくないわ」

と、光海君がおっしゃるので、左右の者たちもあきれはて、胸中でその愚かさをひそかに笑った。

光海君はまつりごとをあまりにもおろそかにし、一枚の文書もみずから決裁しようとしな。妃をお局の側近い翼廊房に呼んで置いて、昼夜にまつりごとを尋ねて決裁する。妃がもし殯庁にでも出かけて留守のときは、いっさいのまつりごとがとどこおり、光海君はひとりでそわそわして、紙と小刀を置くことなく、紙を切ってはりつけたり、小刀を見てはぶつぶつひとりごとをおっしゃったりする。こんなとき、宦官がもし何かをいったものなら、声を出してしかりつけになる。宦官もうかつには中に入って行けず、外で空を仰いで嘆息するばかりであった。明宗の時代か

らお仕えしている宦官がいて、勇をふるって入って行き、話しかけた。

「どのようなお考えでそうしていらっしゃるのですか。お兄さまの臨海君も人の言葉を聞いて、入侍していらっしゃるって、まつりごとは少しもむずかしいものではございません。文章を学んで久しくおなりですが、知恵は文章を学ぶところから表れるものといえます。王様は先王の御子息で、入って住まわれる家も先王の家なのです。紙も筆墨もすべて先王のものであって、この程度のまつりごとを処理できずに、人をお側に侍らせて置いたまま、何もせず静かに座っていらっしゃる。紙と小刀を持って、いったい何をしていらっしゃるのですか」

光海君は恥かしくて、何もお返事がなかった。

この話が広がってしまい、この年老いた宦官を光海君は憎み、永昌大君の乱のどさくさに殺してしまったのだった。

光海君は宦官に一度仕事をさせると、十度やり直しをさせ、一度使いにやると、十度も行かせ、たとえうまくやっても褒美をやらす、だからといってへまをしでかしたとしても、それを罰することも知らなかった。

六

柳哥はそんな光海君をいつも恥かしいとっていて、毎日、毎時、教えさとそうとする。これからなにがしが上訴するはずだから、こう答えるように、次になにがしが上奏しようとしたら、ああ答えるようにとあらかじめ教えた。そのために、漢文で、あるいはハングル文で答え方を書いて、手筈や、箱に入れて使いの者が行ったり来たりする。御殿の扉が閉っているときは、東の山側にある厠の近くに堂があって、そこに人が入りこめるように小さな穴を開けて置いた。後には、人の出入りがあまりに激しくて、穴があまりに大きくなったので、外から露わに見えないように隠して、内と外から出入りして、連絡し合ったものだ。それもあまりにたびたびだったので、宮廷の堀の外に下僕に小屋を造らせて住ませ、暗くなると、その下僕を柳哥のところに行かせて報告させた。

光海君の寝室には緞子の布で包んだ手筈やふろしきに包んだ箱がころがっていて、一人の侍女はいつも、まつりごとに対する対応の仕方がわかるように、毎日、公事があるごとに柳哥に書いて送らなくてはならず、食事を取る間もなく、苦しく、つらく思っ、一度ひとりごとをもらしてしまった。

「男に生れて、この程度の仕事も片付けられずに、いちいち人にうかがいを立てて、人を往き来させるのか。この寝室には手筈や箱がなんといっぱいころがっていることか」

光海君はこのことを聞いて、命令してこの女を追い出すことにした。噂が広まったのを大いに怒って、本来、性格が残忍であったから、かつてない行状で、この侍女を棒でなぐり、むちでたたいて、あるいは鉄網でなぐりつけたりもしたのだった。その侍女が痛がって、

「王様、どうぞお助けください」

と叫ぶ声が宮殿の外まで振動して聞えた。

内需司に蔵められている物を、しきたりどおり、仁穆大妃が必要でお使いになる

とき、

「蜂蜜はしっかり測って、決った値の分だけ大妃殿には持って行け」

と、光海君がいうので、次知内官のイ・ボンチョンは、

「だれがあえて値段を確めて大妃さまに献上するようなことをしようか。必要なら、いくらでもさし上げるべきです」

といった。光海君は、それでも、

「大妃殿が必要となさる物件はわたしにまず知らせ、それから持って行け」

といて、その時から、まず光海君におうかがいを立てるという慣例になってしまった。

官庁の品物を他の場所に移すことになって、ある者が、

「大妃さまが何もお使いになれないように、よそへ移すのだ」

というかと思うと、別の者は、

「万一、思いがけないことが起こっても、後にそちらに行って、生きのびることができるよう、物を移すのでしょうか」

といていた。そこを梨峴宮という名で呼んで、さまざまな物を運び、積み上げた。

戊申の年(1608)の初めには、光海君がはなはだへり下った様子で大妃さまにいわれた。

「わたしがお母さまをうやまうことはだれにも負けはいたしません。ですから、これからしようとなさることは、すべてわたしにうち明けてください」

大妃さまは感動して、ありがたくお思いになったので、世子に向かって、……と

お答えになった。大王は……という名を手に入れようとして、すべてのことに……
〔欠落あり〕

光海君の世子は英敏でいらっしゃったので、大妃さまはひとしお奇特に思っ
て、男の子の必要なおもちゃなどを、お見舞いに来る際には必ず持って来られた。そ
こで世子の乳母の尚宮である玉環が両手をすって、合掌し、大妃さまの徳をたたえ
て、申し上げる。

「大妃さまがいらっしゃらなければ、われわれに何がございましょう。おいでに
なってお与えくださる徳は空のようです。実の父上は紙一枚さえくださらない。
いったい何に似て、そのようなのでしょうか。牛飼の言葉を聞かずに車を引く牛で
さえ、あんなにも頑固でしょうか。光海君は先王のお坊っちゃんですが、排泄す
る大便が似ていらっしゃいましょうか。いや、似ていらっしゃらない。光海君は
大便をなさろうとすると、朝から厠に入って座り、冬には、昼までかかって、お
加減をうかがうと、二、三度、普通じゃない便をなさる。周りにそうした気をも
ませることがどこに例がありましょ。あることをなさるようと知らせて置い
ても、けっしてなさらない。何度いってもだめで、一度聞いても、聞いたふりも
しない、まるで、車を引く、阿呆な牛のようです」

みんながどうしてそのような大それたことをいうのかというと、それには

「牛のようなのに、どうして牛のようじゃないといえましょか」

と答えるのだった。

七

初めのころは光海君の言葉を人びともまともに聞いて、心づかいもおうようでい
られたのが、しだいにその行いが酷薄なものになっていき、庚戌・辛亥の年のころ
にはさらにはなはだしくなっていたので、人びとの態度にも敬意が欠けるようにな
った。

光海君は尚宮の介衆としだいに親しく情を交わすようになり、妃とは疎くなった
が、まつりごとを処理するときには、妃を呼び出してさせる。後には妃も腹を立て
て行かずにいると、みずからやって来て連れて行き、あるいはへり下って尋ねなさ
ったが、妃はついには、

「この程度のまつりごとを御自分で決定がおできにならないのですか。以後はけ

っしてわたくしにお尋ねにならないよう」

と申し上げたのだった。

光海君は永昌大君に対していろいろと疑った後には、いっそう威厳を出してふるまわれた。また、肉を焼くのは少しだけにして、生のままの肉をたくさん食べ、御飯は粥のように水っぽくしてお上がりになった。生の肉を特に好んだために、眼はそれにつれてしだいに血走って赤くなっていった。

野菜は汚れているとして肉だけを召し上がり、後でお菓子と飴を頬ばりなされた。

光海君の行動は異常で、他の人とはまったく違う。人がやらせようとするのはせず、人がやらせまいとするのは必ずなされる。

心は凶悪、言葉づかいも悪い。その威張りちらすことは桀紂をまね、行実は煬帝よりもひどかった。大妃さまは恐れをなし、後日に先廟の祭りを廃されないかと心配なされた。

そうして、はたせるかな、乱が出来したのであった。

女房たちに対しても、戊申の年(1608)の初めころには、思いやり深く接するふりをして、

「お前たちが大妃殿によくお仕えているので、大妃殿はすこやかでいらっしゃる。お前たちがお世話しなかったら、どうしてすこやかでいらっしゃることができようか」

とっておられた。寝室付きの尚宮がうかがうたびに目通りして、褒美を与えられたが、辛亥の年(1611)からはしだいにうとうとしくなって、行っても気がつかないふりをなされる。お部屋の外にずっと立たされたまま、日が暮れるまで待たされ、入って行こうとすると、用ができて会えないので、帰ってくれといわれる。

一人の老尚宮が、

「先代の王様は大妃さまの女房が参れば、髪を櫛で解いていて、手が放せないときでも、乱れた髪を手でたばねて握ったまま、その女房を寝室に入って来させ、大妃さまの御様子をお聞きになった。洗顔をなさっているときでも、やはり入って来させ、用向きをお尋ねになったものだ」

といったというのを聞いて、光海君はお叱りになった。

「わたしは絶対にそんなことまでするもんか。月に二度もわざわざみずから足を運んで大妃殿のお見舞いをしているというのに、その上、どうして女房を呼ん

で、あれこれと様子を聞かなければならないのか。わたしはわたしの心のおもむくままにするので、そんなつまらないことまで父王のまねをしようとは思わない。わたしにはわたしのやり方があるのだ。二度と口出しするな」
それを聞いて、聞く者みながあきれはてたものだった。

八

光海君が初めて父王の陵にお参りになるとき、宰相たちはみな陵の入口にさしかかると哭を行おうとしたが、かろうじてこらえ、光海君が哭かれたら、続いていつせいに大声で哭そうとした。そうして、今か今かと光海君の哭かれるのを待っていたところ、とうとう哭さずじまいで陵の前にまで着いてしまった。乗り物から降りて、ようやくだれかが注意したものか、光海君はようやく礼式をつかさどる役人に、

「哭く方がいいか、哭かない方がいいか」

と相談された。役人が、

「哭く方が正しいのです」

といったので、やっと陵からの帰りがけに哭かれたが、その声を聞いて、ある儒者は、

「声を出し惜しんで慟哭していらっしゃる。あまり哭き過ぎたと、後になって悔まれるのだろうか」

といった。

こうした天性に加えて、孝行心といったものはまるでなく、暴悪なることはなほだしく、われわれの大妃さまの方に対してもどうして誠を尽くすことをなさるはずがあろうか。

光海君妃は喪時に際して、大妃さまのもとに弔問のために来られることもなく、小祥のときに、喪服を脱いだ後にやって来られるかと思っていたところ、それでも来られず、影さえも見えなかった。そうして、災の種をまいていた。

辛亥の年（1611）に修理のなった昌徳宮においてになり、後苑の散歩にお出かけになるとき、光海君がおっしゃった。

「わたしの方が年長で、大妃殿はお若いですが、まさかわたしの後にお立ちになることもできまい。わたしはしばらく言い訳をいって居残り、大妃殿をまずお行かせ

しよう」

重々に気を使いながら、われわれが先に立って過ごして見ると、はたして大妃さまの後方でお世話をするのを嫌って、けっしてなさらなかった。

この日、大妃さまが入って来られる途中、輦をかつぐ下人がつまずいて、輦が傾き、大妃さまはほとんどお落ちになるところだったが、そのことを光海君妃は聞いて、「おけがはなかったか」と問われることもなく、まっすぐに御殿に帰って行かれたのだった。

年老いた女房たちは懿仁太后が生きていらっしゃったときに今の太妃さまがお仕えなさる様子を見ていたので、このありさまにあきれはてたものだった。それを聞いた光海君妃はため息をついてうらみ、後日にきつと仕返しをしてやろうと目論見をなさる始末だった。

しかし、光海君妃は表面では聞き分けよく、教養もあって、おだやかで大人しいふりをなさっていた。光海君とその手下たちが凶悪で聞き分けがなく、根拠のない嘘をつくりだす。太妃さまは、戊申の年(1608)に宣祖が亡くなったとき、悲しんで、哭泣を昼夜やむことなく行われたが、そのとき、

「いったいどんな人があんなに悲しんでいるのか。自分の息子を王に立てようとして、それができなくなり、それでいっそう悲しんでいるのだろう」

と告げ口する者があって、光海君はそれをそのまま聞き届けたのだった。

また、恩徳とカブという女房が、告げ口をしている。

「壬辰の年以後に先王に仕えていらっしゃったときに使っていた世帯道具を、われわれの御殿には下されなかったが、永昌大君のもとにはゆずり渡そうとなさっているらしい」

そうしたことを光海君のようにまた真に受けて猜疑するものがいったいどこにあるのか。光海君は、

「わたしにくれなかったものを、大君がどの面下げて身につけているか、見ることにしよう」

老尚宮たちに介屎が会っていいかける。

「大君づきの保母尚宮、お元気の様子ですね。いずれ罰として耳に矢を射られることになりましようかね。金尚宮もお加減はよろしいでしょうか。いつか、きつと毒の入った鉢を賜わることになりましようよ」

聞く者みながおぞけだつて、聞かないふりをして、戻つて来た。

光海君妃のところであれわれも食事をいただくことがあって、身分のある両班の出であれば、礼儀をわきまえているはずなのに、下人たちの態度がはなはだ悪く、見知らぬ人を見物するようにあつた。

九

辛亥の年（1611）に宮廷を遷ることがあって、世子が嬪をお迎えになるのを人びとが見物しようということがあった。ところが、他の人は、たとえ親族の者であっても、見物することを突然に禁じられて、

「大妃殿においてもお出かけにならないでいただきたい」

と、間に後宮の女房をはさんで、申しわたされた。大妃さまは、せつかく縁起のいいことなのに残念で、

「嬪をお迎えになることの喜びに耐えず、ぜひ拝見したかったが、そういうことなら仕方があるまい」

とおっしゃって、御覧にならなかった。

すると、すぐその後、

「愛情がうすくて、見にも来られないのだ」

といい出して、さらには

「進豊呈の宴も、喪服を脱いで間もないというのに、どうしてそんなにせいてなさるのか。ゆっくりとなさいませ」

といい出される始末だった。

光海君は計画を立てて選んだ日をいつも自分の心のままに取りやめ、一つ一つ御馳走をすべて準備し終えた後になって、いやとなったら日を先に延ばす。朝廷中に外戚を通して大妃さまに対する中傷をあきれれるほどくり返し、そして広めた。光海君付きの女房の恩徳と介屎らが、まさにそのころしていた話というのは、

「大妃殿側の人間たちがこれから一日でも平穩に生きていけるか見たいものだ。

永昌大君の器物や今は寿進宮にある品物がこちらに移って来ないはずはない。いづれみなきつとわれわれのもとに来よう」

というような、まがまがしい呪いに満ちたものであった。

戊申の年（1608）に先王がお亡くなりになった後に、世間には濫りがわしい話をいいふらす人間が多く、外戚とか婚家とかいうことになれば濫りがわしい言葉が払

拭されるのではないかと考えて、

「公主と大君の結婚相手ということになれば、上徳の多い人物を選ぶべきで、光海君妃の家門から選ぶのがいいでしょう」

という意見もあったが、大妃さまは、

「権勢におもねる百人の奸人であっても、臣下のものが信じて称讃した先王の御遺言を、どうして忘れ、曲げることができようか。婚事は御遺言のとおりに行います」

と反駁された。

壬子の年(1612)、金直哉の乱が起こったとき、光海君の周りでは勝手な占い事と濫りがわしい行いでさらに禍を拡げる心を助長させて、そうした者たちから密告を受け付けるときには、子どもたちの言葉でも取り入れた。その獄事があった後には、朝廷の故老たちが、沈喜寿府院君のところへ行って、

「何ともはや、子どもたちまで密告をするありさまだ」

と語ったものである。そんなとき、冷や汗が背筋を流れるのをいかんともしがたかったが、そんなことから何かかんばしいことが生れることがあるものだろうか。

このときの乱があった後には、光海君の猜疑する心がつのり、門外からでも占いで名高い者はみな呼び寄せ、柳哥の家で占いをさせ、自分たちの目論見をやりとげる方法と、われわれの側の厄運をしっかりと確かめた。また、柳希亮がシンキョントルという者に占わせたところ、その盲人がしたり顔で、

「永昌大君は何かを企んでいます」

という。そこで、

「人が亡きものにしようとしても、はたしてできるだろうか」

と尋ねたところ、

「何としても殺して置く方がよろしいでしょう」

といったということだった。

十

壬子の年(1612)の冬、柳自新の妻の鄭氏が宮廷の内へ入って、娘と娘婿の光海君とともに知恵をしぼって三日の間というもの深夜まで議論をし、癸丑の年(1613)の正月元旦から呪詛を始めた。毛の白い仔犬の腹をさいて持ち込み、人の絵を描い

て矢で射るしぐさを行って、外部の人間が往き来することのない場所や光海君のお休みになるところにそれらを置き、また屏の向こう側と光海君の机の下や枕の下にも忍ばせた。そんなふうなことを四月まで行って、噂が広まっていった。臨海君の変に際して、柳永慶の夫人がやったことまで張本人は別だったとして、いろいろと小言辞を弄し、

「国巫女の水蓮介がそういつている」

と噂を流したのだった。

こうしてわれわれが光海君の周囲に疑いを抱かないようにしむけたのだった。

われわれの側では味方の人間たちが集まる場所もなく、われわれに対して疑いが向けられていないかという心配もしなかったが、また、たとえ心配したところで、どうすることもできなかつただろう。事實は、話がわれわれにもれて来たとしても、われわれ一党の方に落ち度があるのではないかと考えるくらい、われわれの方にはたくらみはなかつた。

四月に柳哥・李爾瞻・朴承宗など光海君の腹心の者どもがはかかって、呪詛を行ったことで、上訴文の一節に銀盜賊の朴応犀が捕盜庁で一つ一つ自己の罪状を告白したことを認めてあつた。その死刑判決文書に決済を下さなくてはならなかつたが、このとき、柳・李・朴の三賊めらは捕盜大将を陥れて殺してしまった。罪囚の朴応犀をふたたび閉じ込め、かくかくしかじかとうち合せをしたので、朴氏はみずから生きのびようと、すべて指示されたとおりに上訴を行ったのであつた。四月二十六日、上訴文が手に入るやただちに變事を告発して、噂をまず広めてから、賊徒の朴応犀に王様の前で、かんで含めるように教えさとしながら、問いただした。

「お前は金府院君の屋敷に行ったのだな。いいか、行ったといえは、生命だけは助けてやろう」

それに答えて、朴応犀が、

「生命は大切だが、府院君など知りませんわい」

光海君も答えろと詰問するのに対して、

「一介の府院君の何が貴くて、あつしが口をつぐむなんてことがありましようぞ。その家の大門さえどこか存じませんわい。いくら生命を助けてやろうとおっしゃつても、知らないものをどうして知っているといえやしよう。王様もあつしらが府院君に親しくお仕えしたとおっしゃるが、府院君もあつしなんぞ知っているはずはありませんわい。他人に対して、不確かなことを、どうして申せやしよ

う」

といいはった。しかし、つかまえた者たちの父母ふたりをつかまえて極刑に処すことにし、あるときは母親を座らせて、その眼の前で息子を笞打ち、またあるときは息子を座らせて母親や幼い弟を笞打つなどの酷い刑罰を行って、それらをたがいに見させるようにした。痛みに思わず出る母親のうめき声にふり向くと、

「息子よ、たとえなかったことでもあったといつて、わたしを助けて欲しい」と哀願する。それに対して、息子は

「いくら両親が大切に、助けたいからといって、嘘をつくのは、わたしらだってつらい。人に罪を押しつけて、どこに行つて、終りをまっとうすることができるんだ」

と答える。

逆に、息子が両親に哀願するのに対して、

「子どもは不憫だが、根拠のないことを、わたしがどうして申せましょう」と、親はいつて、親子がこうして行き違っていた。そのあいだに、徐羊甲という者は、母親がその拷問を受けて死んでしまい、問事郎庁が階段を昇り降りしてそのことを告げると、ぼつりぼつりと話し出した。徐が

「金府院君を知っています」

というので、

「お前がその屋敷に行くと、どのようにされたか」

と詰問すると、

「行くと、酒を出して飲ませてくれたが、謀反をたくらんでいたことはまちがいない」

といったのだった。

徐羊甲は処刑されることになったが、その父の墓を暴くようなことはせず、また、子どもは助けるという約束をして、ついになかったことをあったこととして誣服してしまったのだった。

十一

このときからはさらに子ども大人を問わず、拷問を加え、密告させるように力を尽くし、とうとう大きな事件に発展した。光海君は女房たちも亡きものにして

して、それがむずかしかったので、鬼神を使って呪いを行ったと難癖をつけようとしたが、証拠がなくてできなかった。ある日、朴東亮が手柄を立てようとして、でたらめの裕陵での呪術事件をでっちあげて、

「永昌大君のために順昌という者が先王が御病気のとき、まじないを行ったという話を聞いて、いつも憂慮していましたが、申し上げるおりがなく、いつ腹の中のももやをはらそうかと考えておりました」

と奏上した。

だいたい、裕陵呪術事件というのは、丁未の年（1607）に先王が御病気になられたとき、ある宮人が懿仁王後の裕陵の端の方でクツを行っているのをつかまえたのが発端だった。翌年の戊申の年（1608）の夏に国巫女の秀蘭介を王様みずからが法司で訊問して、証拠がはっきりしないとして、元に戻して釈放したというものであった。

国には秀蘭介のほかには雑巫女を置いていないことはすべての者が承知していることだったにもかかわらず、柳哥は朴東亮にかくかくしかじかというとおりにしたら助けてやろうとそそのかしたので、朴東亮はすっかり柳哥の思いどおりに嘘をこしらえ上げたのだった。われわれの御殿が、順昌を使ってやったこととして、ほんとうに見たことのようにいって、われわれを陥れたということであった。それで糸口をつかんだとして、裕陵での呪術も行い、われわれの御殿でも呪術をあれこれ行ったと誣告したのだった。五月十八日、寝室付きの尚宮金氏と永昌大君の乳母の尚宮、そして寝室付きの侍女であるヨオクと大君の同じく乳母の尚宮である還伊を呼びつけようと書き付けを持って来て、

「朴東亮が自白したのだ。早くつき出して欲しい」

と言って来た。その女房たちが空に向かって叫び、土をたたいて悲しんだので、宮中は振動し、泣き声が空をつらぬいた。

「朴東亮の盗人め。わたしたちの名を知っていたというのか。いったい国家にどんな怨みがあるというんだ」

さらには、

「あちらに引き渡されてどんなにむごい刑罰を受けることになるのだろう。いっそ、ここで首をくくって死んでしまおう」

といって、金尚宮と柳氏は首をくくって死のうとしたが、みながすぐに飛びかかって首の紐を解き、死ぬのを止め、

「ここで死ねば、やはり事を起こして死んだといわれよう。いったん縛に就いて出かけて見ましょう」

と説得したのだった。どうかこうにか歳月が過ぎて行くものの、そのときの悲しみはどんなに深かったことか、天と地がさけるようで、

「大妃さま、今から死に行きます。われわれがどんな目に遭ったとしても、いざれ地下に行つて、きつとお目にかかりましょう」

と言ひ残して出かけるとき、その心中はいかなるものであったろうか。

十二

朴東亮は壬辰倭乱のとき、都城を離れた王様に扈従し、その後、王族と姻戚関係を結んで、宣祖大王の守陵長となった人物である。先王にこうむつた恩恵は天のように高く、われわれの仁穆大妃の御殿でも裕陵山の墓守をねんごろに頼みたいことがあつて、諸臣の中でも格別に厚く遇していた。普断から恩をこうむつていたはずで、金府院君も特に可愛がりなされたのに、凶悪なる謀りごととに与したから、こちらの御殿では怨恨が身にしみて、はなはだつらい嘆きを抱くことが多かつた。思うにこれは、わざと付け火をして人に添え木を抱かせて飛び込ませるのと同じこと、どうして、血と肉でできた人間のすることだろうか。女房たちは、

「朴東亮め、われわれの名前を知っているのか」

と、声を出してなじつたが、この恨みは死んでも忘れられるものではなかつた。破戒無慚な無知な者たちでさえ、これよりひどかろうか。中でも、金尚宮は十四歳のときに宣祖大王の車駕につき従ひ、倭乱の間の行幸ではいつの間もお側を離れずに平定後に無事に都にお伴して帰つた者であつた。それ以来も忠誠を尽くしてお側に仕えたことでは大功臣であつたのだが、女房である理由でもつて半功臣としても扱われず、闕内衛將という役を当てがわれて過ぎしてつたのだった。宮人の中でも特に功績の大きい方であつたから、このときに主謀者格にしたてあげられてつかまへられたのだ。獄につながる西門から出されようとして座り込んだ金尚宮がいつた。

「どこの国の人間が父親の愛妾を羅卒の手でつかまへさせるようなことをしよう。王様も乱暴だが、臣下も同じで、一人として人間らしい人間がない。

李徳声と李恒福の二人の大人は今丞相の席に昇つて座っているが、壬辰の倭

乱の際の扈從の臣であれば、わたしの名前を知らぬはずはあるまい。平壤からさらに咸鏡道に深く分け入るときに、女房たちはごいっしょしなかったが、王様は街道で久しくとどまって、宣伝官を送ってわれわれが大丈夫であるかお尋ねになることを、たとえ緊急のときでもけっしてお忘れにならなかった。その先代の王様のみ子が王になって、今日、こうした恥辱を見ることになるのなら、戊申の年(1608)に、梓宮のもとで死んでしまえばよかった。

明国の将帥が平壤の普通門を打ちこわし、日本人たちを追っばらったという報せが伝わって、われわれすべてが跳んで喜び、ふたたび生きて都に帰る日が来るという笑い合ったのが昨日のことのようだ。そのとき、倭乱をまぬがれ、宗廟と社稷のために急いで兵を遣って宮廷にもどったものの、人民の心は鎮まっていなかったので、チョゴリの紐をほどいて、ゆっくりと休むということもなかった。

ある日、下人が鶏をつかまえようと上がり込み、後宮を盗み見する盗賊かと、女たちが驚き出たことがあった。王様は内宮たちに守り刀を与え、『急な事があれば、自ら死ね』とおっしゃった。みなのが守り刀を手にとって立ち、胸をどきどきさせて待っていたが、そうした時節がすっかり過ぎて、先王のみ子が王の位に即き、今日こうしてわれわれが恥を見ることになるうとは、どうしてそのときわかっていたらう。

医女の手で連れ出されるのでなく、荒々しい羅將の手でつかみ出されようとする、この恥はわたしにはまったくもって不当だ。大王が親しくなされた女子や禄を食んだ臣下たちは、みなさんしっかりと理解して置いて欲しいものです。こんな場合に、こんなふうにしていいものか。こんな道理で王を放って置いたなら、それこそこの国が滅びるきざしでしょうぞ」

十三

こうして長い日が暮れるまで、金尚宮は命令を待って、事情を陳述する機会を得ようとしたが許されなかった。ただ、金尚宮の話聞いてつかまえるのに羅將ではなく、医女を定め、遣わしたのだった。

だが、獄中で無実を訴える暇もあらばこそ、すぐに引っぱり出されて毒薬を賜わり、以下、大王に近侍した者たちすべてが毒薬を賜って死んだ。そうして残った者

たちも尚宮に至るまでことごとく重刑が科されることとなり、さらに朴東亮の自白によるということで、六月十三日には十三人を召し出す召喚状が出されたのであった。

侍女のケラン、水賜の鶴千、手母の彦今・徳福・春介・ピョクム、保母尚宮の弟ボクイの下僕である道西非・古隠伊、金尚宮の下僕である甫老未・ボサク、大君の保母尚宮の礼選、手母の香介などを、都事と羅将と当番宦官のイトクサンがやって来て、

「早くひっぱり出せ」

と督促した。泣き声が天地をゆり動かし、新たに悲しみにくれて、宮中がどよめいたが、泣きながら、人びとがいう。

「朴東亮など知っているものか。だが、どうしてあいつは見ず知らずのわれわれをこうして悲しませるのか。死んで怨霊になってでも、朴東亮を忘れることはあるまいぞ。大妃さまは無実にもかかわらず人に拘束されていらっしやる。わたくしどもがついには無慚にも死んだとしても、なんの恨みに思い申しましょうか。大妃さまはどうか長生きなさって、わたくしどもがこうして死んでも、この怨讐をどうか忘れないでください。さあ、わたくしどもは死んで行きましょう」

人びとの中で香介は病気でそこに顔が見えなかった。それを、隠れて出て来ないのだといって、医女五、六人が、貞明公主と永昌大君がいらっしやる寢室にまでずかずか入って来て、くまなく探したものの見つからず、

「さあ、早く出すのだ」

と督促し、せついた。人びとが背を向けて逃げ出そうとしながら、

「数日前に病気で里に帰っております」

といっても、しきりに、

「早く出せ、出さないようなら、監察尚宮を牢屋にぶち込んでしまえ」

と叫びまわった。

医女が六、七人も宮中を探しまわっているので、公主と大君はとてもこわがり、大妃さまは大妃さまで拘束衣を着てうっ伏していらっしやった。

「いもしない女房を出せという。こうしつこく督促する必要がどこにあるう。

来ている宦官たちに、わたしがみずから話をしよう」

とおっしゃって、宦官に

「里に出て、いないといっているではありませんか」

とおっしゃった。それに対して、

「嘘はおためになりません。早く行って、出してください」

と申し上げる。大妃さまは、

「心のままにもならないものだ」

とおっしゃるのみであった。

医女が、

「寝間まで探せということなので、くまなく探して、けっして見逃がしてはならないぞ」

と叫ぶのを、女房がこぶしを振り上げてしりぞけ、

「お前たちはいったいどうして、どこのだれがいらっしゃるところだと思って、こうも礼儀をわきまえずに振る舞うのか」

と怒鳴りつける。医女たちも、

「われわれとて身過ぎのため、生きるためにすることなのです」

といて、みんな中へ入って行ったが、二人のお子は大妃さまに抱かれて、ねんねこの下に伏して、やっとのことで息をして、すすり泣いていらっしゃった。それを拝見すると悲しく、胸が破れるようで、とてもじっと拝見できるものではなかった。

十四

その翌日、監察の尚宮を二人とも連行して行き、六月二十八日には、永昌大君の乳母が四人いるとして、それに召喚状を書いて、

「この四人を全部出せ」

という命令が下った。

「大君が成長なさるにしたがって、乳母たちは暇を取って里に下り、今は宮中にだれもおりません」

という、

「隠し立てをせず、早く出すもんだ」

と催促して、さて、いないとなると、宮廷の外までも探索して、つかまえて、連れて行った。七月には水賜のミョンファン、手母のシンオク・ピョクムなど六、七人の下人をつかまえて行った。しかし、宮人三十余人が一言も弁明をせず死んでし

まい、呪術を行ったことを証明できないことを残念に思っ、女房の召使いで年齢が十五歳ほどになる者を連れて来て、御馳走を食べさせ、

「生命は助けてやろうから、こうこういうのだぞ」

とそそのかした。召使いは人びとが死んで行くありさまを見て、忠誠心をもっていても生きて行くことのできないのを知り、どうして、好き好んで死ぬ道を選ぶことができよう。召使いは、いわれたままに答えて、そのとき、呪いを行っていたと自白してしゃべってしまった。そこで、平素から柳自新の屋敷でいろいろと面倒を見ていた盲女の高成を手厚くもてなして、あれこれといいつけたところ、高成は手を引く者もなしにいそいそとやって来た。高成にいいつけるに、

「こちらは大君付きの女房で、わたしは大君の保母尚宮です。光海君とその王子の運命はどうなっていて、また運数はどう作用しているのだろうか。甲辰の年生れの者が丙午の年生れの者のために、乙亥の年生れの者と戊戌の年生れの者を害そうとしているが、それを果せるか、果せないか」

という。高成は、そのいいつけに従って、

「成功するか、失敗するか」

と呪術を行う。ありとあらゆる方法を使って、占いに用いる獣についても、あれこれと指示を与えた。そうして、日を定めて、

「吉凶はどう出たか」

と尋ねながら、

「お前に占いを依頼したのは、こちらが永昌大君の側で仕える女房。わたしは永昌大君の乳母です」

と吹き込んで、この言葉を忘れないよう、何度もくりかえして耳にささやいて置いて、高成をつかまえた。そうして高成を問いただすと、まったくあらかじめ聞いていたとおり答えたので、高成が自白したということになった。その上で、高成に聞いた。

「呉允男がお前を訪ねて来て、占いをしたことがあったのだな」

高成が、

「呉允男という名は聞いたこともございません。占いならイム別牌ビョルベがいたしました」

といい、また続けて、

「永昌大君の運勢がどうだこうだと云々しながら、占いをいたしました」

と。そこで、ふたたび問いただして、

「お前はまちがっていよう。それはイムビョルチャじゃないのか。呉允男が別牌^{ビョルベ}で、呉別牌のことに違いない」

と。ふたたびいいはった。そこで、

「とんでもございません。呉などではなくて、イム別牌でございます」

と、ふたたびいいはった。そこで、

「イム別牌などという人物はいない。お前は知らないらしいが、呉別牌のことなのだ」

と、強引に決めつけてしまった。呉允男は釈明もできず、堂下に死んだ。十二歳になる彼の子が、何も知らないというのを、教唆して、

「父親が占いをしていたと話してくれたら、お前の生命だけは助けよう」

といい、それで、とうとう、

「確かに、父は占いをしていました」

と。いって、呉允男の息子が自白したという噂を広めた。ありのままにしゃべったなら殺されるところであったのを、生きのびさせようと約したので嘘の自白をしたのであった。

十五

女房たちがほとんど殺されたというのは、なんともはや金氏の恩徳というべきであったろうか。しかし、それで満足したということもなく、ほんの身分の低い女房のことであっても、けっして生命をあだやおろそかにはあつかわず、軽んずることなくみんな残さず、打ち殺してしまったのだ。

だいたい、今度の強盗事件というのは、もともとたくらんだもので、盗賊たちが米袋を背負って門閥の高い家に忍びこんで、

「仁穆大妃のところでは、光海君とお世嗣ぎを殺そうとまじないをなきて三カ月になるが、なかなか験が現れなくて困っていらっしやる。どこかにすぐれた巫女がいないかとお探したが、このあたりにムダンはいないものか」

と、ふれて回ったのだ。

そのようにするとき、事態はすでに進んでおり、心苦しく思っ、尋ねてみようとする様子をあらわにするのだった。このようなことがあってからというもの、

人びとはこの獄事の摘発を正当なことと考えるようになった。

毛の白い仔犬の腹をさいてさし上げるのは柳自新の妻がやったことで、丸くて薄い行李に入れて持って行ったのだった。

この殺人強盗の誣告によって父の府院君が捕縛されたという話をお聞きになって、仁穆大妃は庭の敷石にみずからの頭をぶつけて、

「永昌大君に由来するこうしたわざわいがお父さま、お母さま、そして弟に及ぶのを、どうして黙って聞いていられましょう。わたしは髪を切って、吉凶を見たが、今は大君を連れて行って処断をあちらに委ね、お父さまと弟を解放してもらおう」

とおっしゃった。さらに、

「子どものことで父母にわざわいが及ぼうとするのを、とてもじっと見てはられない」

とおっしゃった。それに対して、

「どうしてそんなことをおっしゃるのか」

と尋ねると、

「永昌大君は臨海君に誠をつくして仕えていたものを、持病によって亡くなったのに、兄殺しという噂を流し、先王の薬飯に毒を入れて殺したとして、先王の宮人たちは何も知らない立場であるにもかかわらず、永昌大君を弑父殺兄の者として、しかもこちらの女房たちが淫奔であるとの噂を流した。この怨みは不共戴天というものです。文書は送ってもらわなくて結構です。幼い大君が何を理解しましょう」

とおっしゃる。そうしてお父さまと弟の釈放を柳自新の妻に請われたが、それに対して、

「徐羊甲の父親と、朴応犀の父親のどちらも西人で、金悌男の味方だった人間です。どうして知らない人間だといえましょう。疑いの余地のない事柄です。二度と妙なことをおっしゃらないでください」

と答えたのだった。

二カ所で起こったという、こうした弑父と淫蒸のことは、われわれのまったく与かり知らないことであったが、この言葉を聞いて、ようやく何があったのかを理解したのだった。その当日、薬飯や小豆餅を召し上がって、たちまち王様はお吐きになり、御危篤になられたのだった。王様の近侍の人びとがすべてあちらの心腹の者

で、毒を盛ったとしても少しも不思議はない。一方、賊臣の鄭仁弘の讒訴があって、それがきっかけで、平素の病患が御危篤の状態になられた。わざわざ刀で切ったり、鞭で打ったりしたので亡くなったということではなく、あえて、そのくらいのことをしたのなら、弑父ということもいえようか。淫烝ということも、先廟に近くお仕えたスクチンという者は介屎の家中の人間で、いつもねんごろに対応していたものだから、そこで淫烝という噂も立ったのかして、いささかも異常なことはなかった。殺兄ということも、光海君のしたことで、兄の臨海君が天も仰ぎ見ることができないように刺の囲いの中に閉じ込め、味噌のひと固まりと麦飯をさし上げるだけで、明の将軍がやって来るとわかるとすぐに、自己の腹心の医員を送って、酒饌をととのえてさし上げた。そうして毒酒を飲ませ、オンドルに火をつけ、しきりに火をあおり、部屋を熱くした後に、臨海君を入れて閉じ込めたのだ。熱くて息ができず、胸を痛め、血を吐かれるのを、そのときには下人たちもこっそり中をうかがって見物していて、それを禁ずることもなかった。そうしたことをどこに知らない人間がしよう。にもかかわらず、仁穆大妃がこのようなことをしたという噂を流したのだった。

十六

たとえこういう噂を立てられても、誤ったことを行い、そうしてみずからの罪をなすりつける卑劣な輩と不共戴天の敵となるのも、空しいことであった。噂を流して置いて、五月五日、差備門に一万の兵を配して取り囲み、昼、夜となく木鐸をたたく音が鳴り響いた。そうでなくとも、大妃さまは昼夜、陸に上がった魚が跳ねるように卒倒して、悲しんでいらっしまったのに、木鐸の音が震動して、身体をつらぬき、卒倒なさるようなことが何度となくあった。

このように準備をし終った後には、大妃さまが無実だと弁明なさることに対しても、無理無体に言いがかりをつけ、何につけてもわざと事を起こした。女房の姪のまだ若い庇壁というものを極刑に処すといつて、やさしく尋ねると、

「そうしたまじないをわたしが行い、穆陵の土を掘って、符籙を埋めたのです。

宮中の都提調と同行し、夜遅くなると、守門将に頼んで都城の門を往き来させてもらいました」

と答えた。そのような重大な罪となる話を打ち明けたので、疑いをさしはさむこと

もなく、穆陵に人をやって、祭祀もとり行わずに、床石の下を三尺ほど掘らせてみたが、何も出て来なかった。そこで、二カ所ほど掘らせ、今度は裕陵の方の上って掘らせてみた。

まったく無知な下人であったとしても、両親の墓を掘り返すようなときは、宗廟にお詣りし、心を乱すものであろうが、在天の霊を驚かせ、血にまみれた肉塊を引きずり出し、羅将や兵士たちに宮廷にまで運ばせて、寝殿の渡り廊下の局に置かせた。女房たちは老いも若きもこわがって、自分たちをも捕えに来たと考えて、床の下にでも隠れようと足をさ迷わせるが、そのありさまを記すのおおぞましい。

光海君妃は続けて、日ごとに手紙を書いて送り、催促をくり返した。

「お前たち女房すべてが知っていることで、卜尚宮と文尚宮のどちらかが関わっている。卜と文とはともに甲子の年の生れで、甲子の年生れの二人の内のひとりを早く出して欲しい」

たとえ無実で、それを主張したところで、その終りをまっとうすることはむずかしい。甲子の年生れの尚宮を出すように請われたところで、いったいだれを信じて送り出すことができようか。

われわれの大妃さまがお答えになるには、

「人として生きて、たとえいいことをしても福が来るかどうかわからないのに、まして邪悪なことをして、どうして福が来ると信じられよう。これもやはり天数というべきで、悲しみが泰山のように尽きることがない。わたしがまだ生き永らえているのが不思議なくらいだ。昼夜わたしの眼の前から去ることなく仕えてくれた者たちを捕え、幸いに残っていた者を、それさえさし出せという。甲子生れの一人をさし出せば、きっと拷問を加えて殺してしまうのでしょう。わたしはなんらまちがったことをしていない者を、自分だけが生き永らえるために、どうして引き渡すことができましょう。そちらにも賢明な御婦人方がついていらっしゃろうに、光海君の顔に泥を塗って、面目を失われるような真似は、どうかおやめください」

とおっしゃったので、それ以後、あちらからも甲子の年生れの女房の引き渡しを要求するようなことはもうしなかった。

十七

しかし、また何度もくり返しいがかりをつけて来る。朴自興が李爾瞻の女婿になってすぐ、引き出物を進上することがあって、われわれの御殿では答礼として枕を授けたことがあった。そのときに、

「枕の中にまじないをしたようだ。枕に頭を乗せたところ、枕の中から雛鳥の鳴く声が出て、開いてみると、骨片や棺の切れ端が入っていた。どうしてこんなことをするのか。やはり寢室を世話する甲子の年生れの女房のやったことだ」といいがかりをつけるのだった。それにしても、こうした思いもよらない悪知恵を出して、残った女房たちまでも、みな殺そうとする。天地間にこうした凶悪な人間がまたといるものであろうか。

幼い永昌大君が宮中にいらっしゃることに気を使い、光海君は万代にわたって自分がそしられることを恐れて、善良な人間を装って、

「永昌大君を朝廷から出すようにと、毎日せつづく者がいるのだが、幼い子が何をわかっていようと、わたしは聞き入れもしなかった。しかし、盗賊どもと交わって謀反をたくらみ、その一方ではまじないも行って、大乱が出来た。これを永昌大君以外のだれの罪にしようか」

このような話になって、時を置かず、光海君は宦官を遣わして、

「永昌大君をしきりに引き渡すよう催促してくる者たちがいましたが、わたしは聞き入れず、堅くことわりました。しかし、今や朝廷中が怒っていて、朝廷のこの怒りを解くために、大君は一度宴に参席なさってはいかがか。しばらく門外に出ることで、みなを怒りを解いてください」

と言って来た。話がまがまがしいものとなり、大妃さまはじっと聞いていることができず、お側に仕えている者たちもふたたび心を取り乱して、肝腸がしめつけられるようであった。

返答をせずにはいられなくなって、お答えになる。

「天地の間にしでかしたこともないような大きな変を出来させ、父上と兄上とを殺し、私の子どものことで、大きな不孝を重ねる。これは天地の間に受け容れられることのないことです。大君がもし大人であれば、わが子ながらもお出しして、両親と兄弟の生命を救おうとするのも一理あるかもしれない。だが、今はま

だわたしの膝下を離れることのない七、八歳の頑はない、東西もわからない幼な子です。当初は、永昌大君を引き連れて、召使い同然に見なしてでも大人になるまで過ごさせ、両親と兄弟の生命を助けて欲しいと手紙を認ためても、受け取ってもらえなかった。今になって、どうしてこんな話をなさるのか。幼い子には何が何だかわかるまいに、その子に大人の罪が及ぼうというのはとんでもないことです」

それに答えて、

「先王は行く末を不愍に思っ、御遺言を残されている。永昌大君については御心配なさらないように。髪のお毛をお送りいただいたが、いただいても仕方がないので、お返ししましょう」

と、光海君は言ってくる。大妃さまは、

「お父上が亡くなることを考えると、肝腸を切り取るようですが、国法は重く、わたくしの心のままに生命をお救いすることはできない。この子はまちがっても先王の遺子で、不吉なことがけっしてあってはならないが、大殿の王様は今さらのようにさし出せとやってきたりして、話がころころと変わるのが心配です。この幼な子をいったいどこに隠せましょう。わたくしが抱いたまま、いっしょに死んで行きましょう。一人で行かせることはとてもできません」

とおっしゃる。すると、光海君はまた手紙を送って来て、

「まさか子どもが知っているはずありませんが、都城の門外で療養することも昔からままあることで、その程度のことと考えて、外にお出しになってください。朝廷の者たちがあまりにうるさくいうので、その者たちをなだめようとするだけのこと、大君に害をなそうというのではないかという御懸念はまったく無用です」

と言ってくる。それに対して、大妃さまは、

「わたくしの体面を考えてのことではなく、大殿も先王のみ子、大君もまた先王のみ子であり、人間の情というものを考えると、どうして害されることがあろうなどと心配をいたしましょう。ただ、大君が十歳にもなっておられず、大殿も御存知のとおり、門外での療養など一度もしたことがなく、その幼い者をどこに置いておけましようか。大殿はしきりに催促なさいますが、どうか先王のお気持ちを付度なさって、人情を施してください」

とおっしゃった。それでも、光海君は、

「門の外にお出しすることになさってください。まさか、遠いところにお送りするはずがありませんか。この西門の外、宮廷からもほんの近いところにすでに家を用意してあります。宮廷の中にいらっしゃると、人びとがかえってせつき、亡きものにしてしまえばいいのにと、この三、四カ月は毎日のように言い出す始末。たとえわたくしがそれを聞かなくとも、人びとは言いつのって、うるさく、かえって西門の外に大君をお出しして、人びとの気持ちを落ち着かせることが、この際、大君のためにも得策でしょう。このわたくしが大君のお世話をいささかも厭うことがございましょうか。けっして嘘は申しません。わたくしの言葉を百回信じてください。きっとよきようにはからいますから」

と言って来られる。大妃さまは、

「何度も何度もそのようにおっしゃって、悲しみの中でもいっそう心配が募って、先王のことを思い、また昔日の国母であったことに思いを馳せていただき、感激しましたが、大殿にはもう一度お考え直し願います。人は子どもをたくさん持っていますが、一人一人がすべて貴く思えるもの。わたくしに二人の幼な子を遣して、先王はお亡くなりになったが、その時に後を追って死んでしまえばよかったのです。今まで生き永らえたというのも、母親の情として二人の幼な子をこの世に遣したまま死ぬことができず、か細く生命の炎を燃やして来ましたが、今になってこうした災難に遭うのは、大王に殉じて死ななかった罰に違いありません。いっそ死んでしましましょう。あのような幼な子を一人っきりで行かせて、わたくしだけがおめおめと生き永らえることがどうしてできるでしょう。わたくしを追いかけるようにさせて、いっしょに出ることにしましょう」

とおっしゃる。そこで、光海君はくり返し、

「それはよろしくありません。永昌大君が宮中にとどまっていられるので、朝廷の者どもが怒って、亡きものにしようとするのです。わたくしは大妃殿のことを考え、大君のことを考え、どちらにもよかれと思って事を運ぼうとしましたが、ついにこうしてお聞き入れにならないようであれば、わたくしもわたくしの思い通りにはできず、朝廷の者どもが望むとおりにやらせるばかりです。今の今でも、永昌大君をお出しになれば、生命だけはお救いしましように、こうしてそれを妨げ、お出しにならないので、生き永らえさせ申すこともできません」

十八

光海君のしつこい要求に、大妃さまの周りに集まっている人びとが申し上げる。
「初めから凶悪な心を抱いて、そのときごとに話が変わり、いろいろと難題を吹きかけて来る。とてもがまんのできることはありませんが、適当に取りつくり
って答えておきましょう」

それに対して、大妃さまは、

「こんなに頑固な子を出すことは、わたくしにはとてもできない。当初からこの
ようなことになりそうで、わたくしはすぐにでも死のうとしたが、老女房たち
があまりに悲しんだ。わたくしが死んだら、女房たちは一人も生きてはいけない
だろうと、なんとか生命をつないでいる女房のことを気の毒に思い、悲しみをこ
らえて生きていた。父と兄とが殺されたという話を聞いても、今まで生きのびて
いたが、永昌大君をゆずり渡した後で、いったいだれをたよりに生きて行くこと
ができよう。わびたところで、聞き入れる相手ではなく、ゆずり渡すことも、と
てもできない。天地の間にこの悲しみはたとえようもない。わたくしには決断を
下すことがどうしてもできない」

とおっしゃった。間に立つ女房に手紙を渡して、その中で、光海君は、

「お前たちが大妃殿の側にお仕えして、いろいろと画策していることは露頭して
いる。いったいだれが立ち回って、永昌大君を出さないようにしているのか」
と書いていたので、その手紙を呼んだ女房は元気をなくして、大妃さまに申し上げ
る。

「光海君はいろいろと凶悪な心を抱いていて、本家宅や外家宅で女房たちをすべ
て引っぱり出して殺してしまいました。今は永昌大君を引きずり出そうとしてい
て、心配なこと極まりがありません。どこにこんな話がありましょう。天もどの
ような過ちを見つけて、このようにむごい目に遭わせようとするのでしょうか。気
の安まることとてなく、日ましに心配だけが募りに募って来ます。さしたる理由
もなく、『門の外に出すだけでも出してください』と言って来ていますが、お出
しすることにいたしましょう。虎に出くわしても、気をつければ助かることもあ
りますが、この虎は避けようにもその術がありません。すみやかにお出して、
生命だけでもお救いすることにしましょう」

大妃さまはいっそう悲しみにくれて、心配は深まるばかり、そのありさまはたとえるものどてない。そうこうしていても、宦官がやって来て、

「早くお出しするように。遅れば遅れるだけ、罪が大きくなる」とせつづく。抗ったとて、とうてい勝てないとあきらめて、

「大君を安心させようとして、何日にもわたってお話くださり、内殿でもごまかしがないう、言葉を尽くして宮中にお手紙をくださったが、わたくしの悲しみをいったい何にたとえることができよう。大君はあくまでも先王の遺子であり、寛大な処置で、天が与えた生命を安らかに保って生き永らえることができるようにしようと、重ね重ね言ってくるので、それを信じて、大君をお出しすることとしよう。しかし、わたくしは、父と兄とをすでに亡くしてしまっていて、その悲しみは言葉に尽くせないほどである。今、次兄と弟が存命のはずだが、お願いですから、この二人の兄弟が生きているようだったら、安心して、大君をお出ししましょう。悲しみの中で家族を失っても、家に跡嗣ぎが絶えるようなことにはならないようお願いします」

とおっしゃった。とうとう、決着がついたので喜んで、光海君がおっしゃる。

「二人の御兄弟のことは御安心ください。大君を早くお出しください。紙やら文房具やらは宮廷にあったとおりにそのまま揃えて送ってください。出来心を起こす者がいて途中で横取りする者がないように気を付けましょう。また節約して少ししか送らないようなことはなさらないように。宮廷の外での療養というのをわたくしも行ったことがあって、そのおりは以前にまして健やかで平安に元気になりました。毎日、安否を尋ねる人が出入りするようにし、食べ物もお心のままに送ってお上げになって結構なのです」

といったものだった。

(続く)